

令和八年度東京都立青井高等学校第五十回入学式 校長式辞

穏やかな春の光、校舎を取り巻く木々の新緑も一段と映えるこの佳き日に、学校運営連絡協議会の皆様、防災教育推進委員会の皆様、そして、同校PTAの皆様の御臨席を賜り、令和八年度東京都立青井高等学校第五十回入学式を挙行できますことは、誠に喜びの極みです。

ただ今、入学を許可しました百十四名の新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。そして、ようこそ青井高校へ。皆さんを新たな仲間として歓迎の意を表します。また、御列席の御家族や関係者の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

青井高校は、昭和五十二年に開校し、地域の皆様に温かく見守られながら成長し、今年度挙行する創立五十周年記念式典を前に、本日、五十期生の皆さんをお迎えすることができました。

青井高校は、「いつか輝く 今を始めよう」を合言葉に、新たなステージに向け、青井フィロソフィの設定し、未来を拓くキャリア教育を展開するなどして、自信と誇りある生徒、より高い志の生徒の育成にチャレンジしています。

さて、今日の社会において、〈対話〉は、マジックワードであり、全ての問題を解決してくれるかのような取り扱いを受けています。

例えば、海外では、対立や緊張が高まる国や地域の間を良好で円滑な関係にしようとする場面、また、国内でも、まちづくりや行政サービスに関して、説明や意見聴取、一定の

合意を得ようとする場面において、〈対話〉という行為が求められたり用いられたりします。

しかし、実際は、人の言うことをよく聞かず、自分の考えを押し付ける人がいる一方、同調圧力が働き、場の雰囲気にとぐわなないことは極力語らないという人もいますし、そのような場面を回避する人もいます。また、日頃から「〈対話〉をしている」と思っているも、家庭や学校、日々立ち寄りのお店で、家族や親しい仲間と、挨拶に続けて、天気や昨日の出来事について話しているだけであったり、スマートフォンやタブレットからインターネットにアクセスして、普段言わない本音をつぶやいたり、過剰な称賛や攻撃的な非難をしたりと、実際、そこにあるとしても、〈対話〉が成り立っていないことも少なくありません。また、〈対話〉を重ね、語り合えば語り合うほど、「伝わらない」ことや「理解できない」こと、「分かり合えない」ことを目の当たりし、他人との違いがより微細に分かるようになり、〈対話〉は、他人と同じ考え、同じ気持ちになるための試みではないことをはじめて実感を伴って理解することになります。そして、時には「私の発言を否認された」、「私を否定された」と感じることもあり、緊張や対立が一時高まることによって、戸惑いや痛みが生じること、さらには、却って、何かを失ったような感覚を抱くこともあります。

それでも、私は、より深い相互理解、目的や意味の探求、意見や立場を超えた解決策の生成を目指して進められる〈対話〉の可能性を信じており、この学び舎、青井高校での生活の中に、この〈対話〉を取り入れることで、皆さんの学校生活がより充実したものになることを期待しています。

結びに、保護者の皆様には、学校の実施に御理解、そして御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます、新入生の皆さんが、本校での三年間で心身共に大きく成長することや校内外での活躍を期待し、式辞といたします。

令和八年四月七日

東京都立青井高等学校長 久保田 哲司